

短期交換留学生向けインターンシップ授業

－企業体験者講話の導入と留学生の意識－

Internship Course for International Exchange Students:

－ Introduction of Entrepreneurs' Lectures and Students' Consciousness －

恒松 直美 (広島大学)

TSUNEMATSU, Naomi (Hiroshima University)

総合学術学会誌 第11号 日本総合学術学会 2012年
Journal of Society for Interdisciplinary Science, Vol.11
Japan Society for Interdisciplinary Science, 2012

短期交換留学生向けインターンシップ授業
- 企業体験者講話の導入と留学生の意識 -

**Internship Course for International Exchange Students:
Introduction of Entrepreneurs' Lectures and Students' Consciousness**

恒松直美 (広島大学)

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

Abstract :

This article examines how the international exchange students' consciousness is influenced by attending the lectures of entrepreneurs introduced in the internship course for international exchange students at Hiroshima University. This internship course has been developed since 2003, and this course has provided international student interns with the opportunities to work at local companies and local municipal office. The student interns have highly valued their internship experience which has affected their future career. Since 2009 the lecture series of entrepreneurs have been incorporated into the course content so that exchange students have opportunities to directly hear the actual voices of working people. This lecture series have provided the new opportunities to know the diverse dimensions of work life and organizations outside the university and to find connection between academic learning and practical knowledge.

Keywords: internship, international exchange students, consciousness, cooperation with industries, career

はじめに – 本研究の目的

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム(HUSAプログラム)¹の交換留学生向けに開講している“HUSA Internship I : Career Theory and Practice”(「HUSA インターンシップ I : キャリア理論と実践」)において2010年度より導入した「企業体験者講話」に焦点をあて、短期交換留学生の意識変容について考察する。高等教育経験者の高等教育とキャリアにおける意識変容の研究²の一環として、交換留学生の社会人との接触に

よる意識への影響に焦点をあて、交換留学生が「企業体験者講話」から受けた影響及び大学教育と自らの将来との関連付けについて考察し、今後の授業の発展に生かすことを目的とする。

HUSA プログラムは日本語の授業を受講しつつ英語でも授業の受講が可能な交換留学プログラムとして1996年に設立された。毎年40~50名の交換留学生を受け入れ、うち5~7名は日本語が上級レベルであり、正規学生の受講する各学部の授業も受講している。国際的視野からの産官学連携の促進と留学生が日本留学中に社会体験を持つことを目的とし、2003年度より短期交換留学生向けインターンシップの授業を開講し、地

(1) 以降、「広島大学短期交換留学プログラム」(Hiroshima University Study Abroad Program)を「HUSAプログラム」と称し、「広島大学短期交換留学プログラム」に参加した留学生を「HUSA留学生」と称する。全世界の協定大学(2011年12月の時点で65大学と2コンソーシアムと協定締結)より約40名の交換留学生が毎年HUSAプログラムに参加している。HUSAプログラムの詳細はHUSAプログラムホームページを参照。
(2) 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト: 日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」と題し、短期交換留学生・日本人学生・社会人を対象とし、高

等教育とキャリアにおける高等教育経験者の意識変容について、大学教育と社会を連携させ分析している。大学生が日々自分の生き方と将来について自分に問いかけ、社会とのつながりを求めて模索している姿が明らかとなった。インタビューでは、普段人に語らない深い内面を語る学生も多く、学生の意識研究における深い質的調査の必要性も認識できた。

域企業及び市役所に留学生をインターンとして派遣してきた。交換留学生インターンの派遣は2010年度までで64名に上る。2004年度より事前研修を授業に導入して授業の充実化を図り、2009年度からは「HUSA インターンシップ I: キャリア理論と実践」・「HUSA インターンシップ II: 実習」の2コースに分類して授業を開講している。交換留学生は日本の大学に1年間交換留学するという、大学院留学や学位取得とは少し異なる特殊な位置づけにある。交換留学生は、将来的に日本での就労を夢に持つ場合が多いが、実現に向けての手ごかりを大学教育でも十分に提供できていない。交換留学生の日本の社会人と接したいとの要望に応えるべく、社会人の実体験を授業で聴ける機会を作る目的で、2010年度より「HUSA インターンシップ I」の授業に「企業体験者講話」を新しく導入した。

生きた社会人の実体験に基づく「企業体験者講話」は、留学生が、日本社会とグローバル社会、企業文化、仕事の意義、大学教育と社会とのつながりについてや、学術知と実践知の関わりについて考察する機会をもたらす。講話による留学生の意識への影響の考察は、グローバル化社会における大学の国際教育と社会との連携の在り方や、学術知と実践知の関連づけ方を学生が認識できる授業方法を開拓する契機となると考える。

グローバル人材と留学生インターンシップの現状

大学教育改革、グローバル人材育成、キャリア教育の重要性が議論される中、研究や大学院での学位取得を目的とする留学生とは種類の異なる「短期交換留学生」³の存在は、大学国際化の議論においてもあまり重要視されてきていない。留学生インターンシップは、国際的な産学連携の発展とグローバル人材育成において重要課題であるが、専門知識や研究能力の有益性が期待できる大学院生インターンは注目されても、短期交換留学生のインターンシップは大学も企業も重要視してきていない。その要因として短期交換留学生が日本社会とグローバル社会にもたらす意義について十分

(3) 短期交換留学生として来日する学生の身分は単位取得を目的とする「特別聴講生」(学部生・大学院生)及び指導教員のもとで研究を行う「特別研究学生」(大学院生)がある。

議論されてきていない現状がある。短期交換留学生向けインターンシップは、採用につながりにくいとの認識から企業側も敬遠しがちである。

例えば、野口・吉川・金子(2009)は、国際的視点からのインターンシップの課題の議論で、米国の大学の優位性として英語による教育やインターンシップによる実践の機会の提供、国際的企業への就職の可能性を指摘し、日本の大学が留学生をインターンとして迎えることによる研究室の国際化、大学院進学促進、企業における優秀な留学生の雇用の促進の効果を挙げている。

このように、大学院における留学生インターンシップもまだ発展途上にあるが、留学生向けインターンシップの重要性の認識は大学院や研究の視点に着目する傾向にあり、交換留学生向けインターンシップについての議論は発展していない。⁴交換留学生が、インターンシップを通じ、日本留学中に社会人と接触し交流することによる長期的な視野からのグローバル化への影響やその意義についても十分に議論されてきていない。

交換留学生にインターンシップの機会を作り、企業体験者講話を導入する意義について論じるにあたり、社会体験が学生の意識や行動に与える影響について述べておきたい。産学連携や社会活動などを通じた学生の意識・行動の変容については実践研究が発展してきているが、日本人学生についての研究が主である。例えば、社会活動を通じた大学院生の意識変容については日淵・谷・上長・則定・石本・齋藤・城(2008)の研究、産学共同プロジェクトの実践を通じた協同による意識・行動の変化についての生涯キャリア発達の観点からの考察に柳田(2006)の研究がある。また、産学連携プロジェクトと連動した課題解決型学習に参画した学生のキャリア形成過程についての柳田(2009)の研究や、「多文化社会コーディネーター養成プログラム」作りに携わったコーディネーター自身がその専門性や力量を省察する杉澤(2009)の研究がある。省察的研究者として研究と実践の関係を考察する試みは、大学における学術知と実践知の連携の方法は研究者自身が模索する課題であることを示唆している。留学生を包含しつつ大学教育とグローバル社会とを連携させた学生の

(4) 交換留学生向けインターンシップについては、例えば、恒松(2011a, 2011b, 2010)を参照。

支援体制の構築は重要課題であると言える。

グローバル化社会では知識には国境がなく、知識・情報・技術があらゆる領域での活動の基盤となる「知識基盤社会」とされる。大森(2007:16)は、日本的雇用システムの問題として「流動する知識労働者の組織超越的・普遍的な知識技能と創造性・活力によって競争力が支えられる今日の知識社会に適合しない」点を挙げ、国際的に通用する「知識社会に対応した学歴社会」ではない日本の現実を大学・大学院教育の軽視と結び付けて論じている。この指摘は、留学生の存在価値を生かし切れていない日本の大学教育と日本社会の現状についての警告でもある。

世界で進むグローバル競争において、日本企業がグローバル・リーダーの質的・量的不足という深刻な課題に直面する中(キャメルヤマモト・太田智 2009)、大学が提供し得る国際教育の影響は大きいと考える。日本語及び日本文化・社会への興味から日本の大学に1年または半年留学し、将来を模索する段階にある交換留学生に日本社会との連携を構築する機会を与えられるかは、留学生の将来やグローバル化社会における日本社会の変革に大きく影響する。この問題は大学国際化の議論とは切り離せない課題である。

留学生の意識とグローバル・リーダーシップ育成

交換留学生の意識変容を考察するにあたり、Mezirow(1994)の意識変容の研究における異文化での影響や価値観の枠の変革に着目し、日本社会との連携による授業の体験が、交換留学生の習慣的な思考や価値観に与え得る影響や、将来のキャリアや展望を変容させる可能性について述べておく。留学生への変容の可能性についての考察は、今後のグローバル・リーダーシップ育成に向けた授業改善に有効的に活用する。

Mezirow(1994)によると、習慣的に準拠している前提や価値、信念を構成している枠組み(frame)、すなわち、「意味パースペクティブ」(「meaning perspective」)によって、経験の意味づけ方や解釈、優先事項が決定されるという。変容的学習とは、既存の意味パースペクティブの再構成を迫り、新たな行動や感情といった意味スキームを再び創り出す過程をもたらす。留学生が日本留学により異文化圏

で社会人と接するインターンシップの授業は、学生が意味パースペクティブを再構成し、自らの世界観を再考する契機となり得る。生き方やアイデンティティについて根本的な問い直しをせまるジレンマとの遭遇、異文化との接触による新しい価値や思想との出会い、啓発的な議論や作品との接触による価値感の揺さぶりにより、それまでの自明性や安定性に疑問を持つようになる(前掲)。企業体験者講話が留学生の意味パースペクティブに影響を与え、新たな意味スキームの構築をする過程に着目し、その変容的学習による学生の意識形成への影響を分析する。

異文化と接触することによる自己変革や新しい文化を創造する変革型リーダーシップ理論(淵上 2002)とも関連させつつ、考察の結果が提示するグローバル・リーダー育成の課題を今後の授業に生かしていく。グローバル・コンピテンシーや異文化間でのコミュニケーション能力向上など、現在求められている異質の外とつながりを形成する能力育成は大学教育の課題でもある。この課題は、教育の対象が留学生か自国の学生かに関わらず、グローバル社会の中で大学が担う教育の重要課題である。短期交換留学生の多くは日本での就労を夢に持つ現状があり、将来的に日本との懸け橋となる可能性が高い。長期的かつ拡大した枠組みで捉えた場合、インターンシップの体験は留学生個人の将来への支援であるだけでなく、日本社会と世界とをつなぐ外交官的役割を担う学生へのグローバル的視野からの支援でもある。大学教育と社会を連携させ、世界各国からの交換留学生が日本社会と関われる場を創出することにより、インターンシップの授業をグローバル教育と国際的産学連携の場にすることができる。日本留学中に世界各国の学生と交わる中で、実社会と接触しつつグローバル・リーダーシップ育成を可能とする授業であると言える。

高等教育経験者の高等教育とキャリアにおける意識変容の研究において、交換留学生の多くが日々自分の生き方と将来について自分に問いかけ、大学教育の意味を模索しつつ、日本社会や企業と関わるための具体的方策が分からないでいる現状がインタビューから分かってきた。グローバル化社会での大学教育の在り方が問われる現在、学生自身もまた自らの将来と自己実

現に不安を抱える現実があり、企業体験者講話の学生への影響の考察は、大学教育と日本社会が、流動的なグローバル社会において日本に留学してきた留学生に対し何を成し得るかを再考する契機となる。

分析の枠組み

本調査における分析の対象を短期交換留学生向け授業である「HUSA インターンシップ I: キャリア理論と実践」を受講した交換留学生とする。授業に新たに導入した「企業体験者講話」参加による交換留学生の意識変容について考察し、日本留学中に社会人の実体験を聴き日本社会と接点を持つことが、いかに交換留学生に影響するかを探る。短期交換留学生向けインターンシップの授業は下記の2種類ある。

1) 「HUSA インターンシップ I : キャリア理論と実践」

- * 日本語レベル：中級・上級（レベル3,4,5）
- * 研修・自己発見・正規学生との協同学習(PBL⁵)

2) 「HUSA インターンシップ II : 実習」

- * 日本語レベル：上級
- * 企業に2週間派遣（時期は通年で企業と調整）

授業は、開講時より改善を重ね、インターン就労に向けた準備の充実化と学生の能力を引き出す授業への変革を目指してきた。「HUSA インターンシップ I」を日本語中級・上級の交換留学生向けに2010年度前期に新しく開講し、「HUSA インターンシップ II」の事前準備の授業としてインターン就労をしない日本語中級のHUSA 留学生も受講できるシステムを整備した。⁶ 学生の理解状況に応じて英語での補足説明を加え、より多くの留学生が社会体験をもてるようにした。キャリア理論も紹介しつつ、実際の就労の場で有用な実務的な訓練も盛り込み、より包括的に仕事の現実的多様性を理解し、イメージに捉われずインターンシップを体験する意義が理解できる授業へと改善してきた。

企業体験者講話は、2010年度前期の「HUSA インタ

(5) “PBL(Problem-based learning)”の日本語訳には、「課題発見解決型学習」、「問題解決型授業」、「問題基盤型学習」、「問題立脚型学習」などがある。

(6) 実際には、より多くの留学生にインターンシップ体験を持たせるべく、日本語中級の学生も派遣する尽力をしている。

ーンシップ I」の開講から導入し、後期より、16回の授業のうち講話を3回行い、学生の自主的な学びを促進する目的で、各講話の次週に講話についてのPBL (Problem-based learning) (課題発見解決型学習) 協同学習を行っている。HUSA 留学生の要望もあり、日本人学生との協同学習の機会を作る目的で講話の授業を全学公開とし、日本人学生の参加を促している。HUSA 留学生に加え、全学公開の講話に参加した学生もPBL 協同学習に参加している。この協同学習では、英語と日本語を駆使し、言語の壁を超えて相互に支援しつつ発表準備をする姿が見て取れる。

2010年度春学期、2010年度秋学期とも各コースに3回講話を導入した。2003年度の開講以来、授業は留学生が日本での生活に慣れた春学期に開講していたが、2010年度秋学期より、「HUSA インターンシップ I」を、交換留学生が来日して1学期目となる秋学期に開講し、即派遣に向けて準備が開始できる体制を整えた。各学期の講話の題目と参加者は以下の通りである。

*2010年度春学期 講話3回

<「HUSA インターンシップ I」受講人数：8人>

留学生の国籍と人数は、アメリカ2人、中国4人、トルコ1人、ニュージーランド1人で、専攻は日本語・日本研究・ビジネス・国際ビジネスであった。学部生7人、大学院生1人で、男性3人、女性5人であった。

*第1回 「企業人の働くモチベーションとは？」

参加：HUSA 留学生8人・日本人学生15人（合計23人）

*第2回 「持続成長する企業とは？」

参加：HUSA 留学生7人・日本人学生8人（合計15人）

*第3回 「企業と人材～考え方の大切さ～」

参加：HUSA 留学生8人・日本人学生5人・

その他留学生1人（合計14人）

*2010年度秋学期 講話3回 + PBL 協同学習

<「HUSA インターンシップ I」受講人数：14人>

留学生の国籍と人数は、中国9人、韓国2人、イギリス1人、フランス1人、アメリカ1人で、専攻は日本語、日本文学、日本研究、ビジネス、英語、工学（機械）であった。学部生10人、大学院生4人で、男性4人、女性10人であった。

*第1回 「社会の中で働くための就職活動」（大学院生）

参加：HUSA 留学生14人・日本人学生5人・

その他留学生1人（合計20人）

*第2回 「人は仕事を通して成長する」

参加：HUSA 留学生 14 人・日本人学生 9 人（合計 23 人）

*第3回 「逆転の発想で国内旅行を活性化する - ペット
ツーリズム - 」

参加：HUSA 留学生 13 人・日本人学生 7 人・

その他留学生 1 人（合計 21 人）

調査方法及び分析方法

2010 年度春学期と 2011 年度秋学期に行った計 6 回の講話について、以下のデータをもとに分析した。すべて自由記述の欄を設けた。

1) 講話参加者のアンケート評価（講話 6 回分）

各講話開始前に全参加者にアンケート調査票を配布し、講話終了後に回収した。HUSA 留学生のみでなく、全学公開授業に参加した学生全員に配布した。講話参加者のアンケート評価表の質問項目は、学生の所属・専攻、学年、性別、出身国、公開セミナーの参加目的、参加した感想、キャリアやグローバル人材に関連した授業やセミナーに参加した経験、社会体験者講話の講師の招聘希望、キャリアや仕事と関連した大学への要望、である。

分析方法：各質問項目についてのすべての記述を書き出し、概念を抽出し、カテゴリー化していった。記述をもとに、回答を「1.講話の感想」、「2.講師の招聘希望」、「3.キャリアに関する大学への要望」の3点を考察の主な項目として回答の記述を集約し、概念を分類し、分析した。

2) 講話についての感想文（課題）

各講話についての感想文（A4 サイズ 1 枚）を課題とし、次週に提出とした。

分析方法：1)のアンケート評価表の記述から抽出した概念のカテゴリーに基づき、感想の内容をカテゴリー化していった。学生自身の言葉を重要視することを心がけ、1)と同様に学生が記述した言葉をそのまま書き出し、概念を抽出しカテゴリー化をしつつ、既にある概念を参考に補足していった。新しく出た概念は新しい概念としてカテゴリーを作った。留学生が表明した意見や感想は多岐に渡った。

考察結果

「1) 講話参加者のアンケート評価」、「2) 講話についての感想文」における回答と記述から概念を抽出し、カテゴリー分けを行い考察した結果についてまとめる。「1.講話の感想」についての回答の自由記述の内容を主に以下の5つの概念に分類した。

1. 講話の感想

1) 日本企業・企業文化についての学び

1.1 日本企業の理念とブランド

企業はビジョンに基づいてプロジェクトを計画し実行している現実と自社の「ブランド作り」の重要性を認識した。

1.2 仕事における現実的戦略・アイデア

具体的な企業プロジェクトの紹介を通じ、ビジネスでのプロジェクトの提案における課題設定・問題分析・方向性の決定とそのプロセス、マーケティングリサーチによる検証と戦略の提示、ビジネスにおける変化への対応と発想の重要性について学んだ。これらの学びは、大学教育で取り組むデータ分析やプレゼンテーションが、実際仕事を遂行するうえで必要な実践知であるとの認識をもたらしている。

1.3 企業における「人」の重要性

企業の重要な経営資源である「人」は、気持ちや考えを持っているため物や金より難しく数字で結果を測れないなど、組織における「人」の価値と重要性を学んだ。個人と組織が相乗的に効果を高めあう重要性、チームワークと協力する能力の重要性、人事評価の方法など、会社の財産である「人」の重要性を認識している。

2) キャリア・就職活動についての学び

2.1 日本企業の情報

短期交換留学生は日本で就労する希望を持ちつつ、その手法が分からずにいる。日本での仕事の探し方、日本企業の採用制度、面接・就職活動に関する情報を必要としていることを述べている。

2.2 仕事をする意味・目的

仕事の価値を発見する重要性、生き生きと働いて会社と社会に貢献し、自分の人生の価値を見つけ成長する重要性を認識している。自分の存在価値を仕事に見出す意義を述べている。学生が記述した、「やりがい」、「人を幸せにする」、「感動する仕事」、「心を

尽くす」、「夢を実現」などの言葉には、仕事を自身の生きがいと結び付けていることが表れている。

2.3 個人と企業・社会との関係

企業のビジョンと自分の価値観や実現したいこととの共通点を見出す必要性、会社と社員の「共栄」の関係、自分のしたい仕事と社会貢献のバランスなど、「個人」と「組織」・「社会」との関係性について考えている。

3) 大学教育の意味・自分探し

3.1 自分の可能性・夢・目標

大学時代は、自分のしたいこと・心から好きなことを見つけ、目標を持ち、総合的能力をつける場であると認識している。選択肢を持ち、機会を生かしつつ積極的に挑戦する場であることを確認している。

3.2 経験・人脈・選択肢の拡大

多様な活動や課外活動を通じて人脈を広げ、多様な価値観を学び視野を拡大するなど、大学は学問の場にとどまらないことを実感している。社会人の「するとは思わなかった仕事を現在している」という実話により、多角的にものごとを捉え、多様なキャリアに備える重要性を認識する結果となっている。また、社会人のキャリアにおける迷いや挑戦の話聞き、学生時代の迷いにも意味があると認識している。

4) 自身の生き方についての学び

4.1 自分の生き方と社会貢献

志を抱いて生きる、意志で道は開かれる、挑戦による成長、「世界人」という自分の認識と貢献、夢を持った生き方、等の記述があり、仕事を人間としての生き方と関連させ、大きい枠組みで捉えている。

4.2 自分探し・仕事とのつながり

自分のしたいことと仕事や将来との関係、自分はどうな人になりたいのか、何のために働くのか、何をしたいのかを考えたい、など「自分」という一人の人間と向き合っている。

4.3 自分の心の持ち方

人生の挫折・逆境における自分の心の大切さ、機会を作り、機会により自分を変え、前を向く、など自分の心の持つ力を認識している。

5) 企業のプロからの刺激・視野の広がり

5.1 仕事をする姿

多様な考え・視野の広さの重要性を知り、知識の幅が広がったと学生は感じている。人材開発担当者による、夢を持ち楽しく意欲的に仕事をしている実際の社会人の紹介による影響は大きい。

5.2 人への接し方

企業講師の特性、社会人の挨拶の仕方、話し方のスタイルや間の取り方、プレゼンテーション能力など、企業のプロの仕事能力から刺激を受けている。

2. 学生からの講師の招聘希望

1) 職種による希望

1.1 多様な職種

学生は職業に関する幅広い知識を得るため、多様な職業・領域について知識を得、実体験を聞くことを希望している。

1.2 グローバル人材

外国人職員を採用している企業の国際経営理念や企業文化を学び、実際に採用された人の実話を聞くことを希望している。外国人の日本での就職の可能性や、その実現に向け自分は何をすべきかの示唆を得ることを希望している。

1.3 人事

実際の外国人の採用状況について情報を得るため、人事や人材開発についての知識を得ることを希望している。

2) 講師の体験に関する希望

2.1 社会で働く意味

生き生き働いている人や人間性を重視している人の話、現在の地位に立つまでの多様な経験の話など、仕事の多面性や豊富な人生経験の話希望している。

2.2 学生に近い存在（大学から社会への移行）

就職活動で失敗した人・成功した人、大学を卒業して間もない社会人など、大学生から社会人への移行をして間もない先輩の体験を知りたいことを希望している。「企業体験者講話」に招聘した企業講師は40代と50代で社会経験を数十年積んだ年齢層であった。プロジェクトを任されるマネージャー、15年の企業での勤務経験を生かし起業した人、大企業の管理職など、社会経験のない大学生と比較して経験に差がありすぎることから、大学生により近い年齢層の講

話を希望している。やりたいことが分からない人、他の人の経験を聞く要望を持つ人達と会いたいとの希望もあり、将来に向けて支援し合える学生間のつながりの構築への要望と捉えられる。

2.3 モデル人材

社会人として活躍している具体的なモデルとなる人の話を希望している。女性の社会進出は男性と比較して少ないため、特に女子学生にとっては、社会で実際に活躍している女性の実例による「ロールモデル」が与える影響は大きい。

3. キャリアに関する大学への要望

将来のキャリアと関連して大学に提供して欲しいものや要望としては、1) 職業について学ぶための機会、2) キャリア教育・就職のための学び、3) 企業の人との交流（世代・経験）、4) 他の留学生で就職した人との交流、5) 国際教育・国際交流の機会、6) 幅広い経験を積むための機会、を挙げている。これらを「キャリア・仕事についての知識」「幅広い体験の場」「幅広い人との交流（企業・社会人・先輩）」と集約すると、知識・体験・交流の幅の広さを学生が求めていると言える。教育と社会とをいかに連携しこれらの学生の要望に応えるかは今後の大学教育の課題である。

「1.講話の感想」、「2.講師の招聘希望」、「3.キャリアに関する大学への要望」についての調査結果を総括的にまとめると、短期交換留学生が企業体験者講話から受けている意識への影響は、以下の事項に要約できる。

1) 自分探し

自己発見・自己実現

世界と社会における自分の貢献

自分と社会とのつながりの発見

2) 大学外の実社会・世界との連携

大学教育の意味の発見

大学教育と実社会のつながりの発見

大学教育・日本社会・グローバル社会の連携

学問知と実践知の融合

経験とビジョンの拡大（学生・国の枠を超える）

3) 仕事の意味

仕事の持つ意味

仕事における「人」の重要性

他の留学生・本学学生との学びを通じ国際的視野からキャリアを考察

「個」と企業・社会の関係についての認識

4) モデル的存在による影響

他の留学生や自国の先輩の実体験

就職して間もない人の実体験

女性のモデル的存在

多様な進路の現実

結語

「HUSA インターンシップ」の重要課題の一つに、交換留学生受け入れ企業にも有益なインターンシップへの発展がある。約2週間の短期間のインターン受け入れでは、受け入れ企業と担当者にとり時間と労力の無駄と捉えられる傾向にある。経営状況に余裕がある時は社内活性化の意義もあるが⁷、経営状況が厳しい状況では、企業側にメリットと利潤を生み出さず、採用に結びつかない留学生インターンシップの継続的受け入れは困難となる。

現在、大学教育と受け入れ企業側の双方にメリットのある交換留学生インターンシップの授業へと発展させることを目指し、「HUSA インターンシップ」を「グローバル化支援インターンシップ」として2012年度から開講する準備を進めている。現在、パイロット・スタディを行っており、その一つとして、「HUSA インターンシップ II」の授業で「企業グローバル化支援プロジェクト」への取り組みを開始した。インターン就労前に派遣先の企業を支援できる課題を見つけて調査を行い、調査結果を企業に提出する試みである。インターン就労に向け、派遣先の企業の知識を得る機会となり、学生と企業双方のモチベーションをあげる契機となる。さらに、企業側もメンターとして研究プロジェクトの指導・助言や研究成果の発表のプレゼンテーションの評価を行うことでグローバル・リーダー育成の一步となる。

その他には、「企業体験者講話」後のPBL協同学習のプレゼンテーションの講話者による評価も企画している。また、グローバル化へと対応できる社会を築くことを目的とし、担当教員の指導のもと、地

(7) 恒松(2011)参照。

域との国際交流行事の支援をインターン留学生が担当する試みも実施している。「グローバル化支援インターンシップ」は、交換留学生インターン・大学・地域が相互に支援し合いながらグローバル化に対応できる社会を構築する授業として発展させていく。

本調査で、日本社会との接点を求め、自分探しをする交換留学生の姿が浮き彫りとなった。1年の短期交換留学は、世界各国からの留学生と共に学ぶ過程で世界を多角的に見る目を養い、相互に影響を与え合う機会をもたらす。交換留学生にとり、大学卒業後の進路は深刻な課題である中、それを現実的に考えられる教育の場を求めている。今後は、日本人学生も垣根を越えて留学生インターンシップの授業に参加できるよう発展させる所存であるが、留学生の授業への参加に躊躇する学生は多く、グローバル・キャンパスの構築には課題が残されている。HUSA 留学生の意識変容の研究からは、日本への交換留学を通じて「人」として世界と自分との関わりを見つめ直す例が多く、HUSA インターンシップの授業を、学生が日本社会・地域・世界の人々とどう関わっていけるかを考え実践していく力をつける授業へと発展させていく意義は大きい。

参考文献

- [1] 大森不二雄 2007 「知識社会に対応した大学・大学院教育プログラムの開発 - 学術知・実践知融合によるエンプロイヤビリティ育成の可能性-」『大学教育年報』 第10号 pp.5-43
- [2] キャメルヤマモト・太田智 2009 『グローバルリーダー開発シナリオ』 日本経済新聞出版社
- [3] 杉澤経子 2009 「『多文化社会コーディネーター養成プログラム』づくりにおけるコーディネーターの省察的実践」(「多文化社会コーディネーター養成プログラム」の展開) 『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』別冊1 pp.6-30
- [4] 恒松直美 2011a 「広島大学短期交換留学生インターンシップと地域企業の国際貢献 -交換留学生インターン受け入れに関する地域企業の意識調査-」 『広島大学国際センター紀要』第1号 pp.51-65
- [5] 恒松直美2011b 「短期交換留学生向けインターンシップ授業における企業体験者講話とPBL (課題発見解決型学習)」 『広島大学留学生教育』 第15号pp.47-61
- [6] 恒松直美 2010 「短期交換留学生向けインターンシップと日本人学生の参加 - 国際的視野からのキャリア教育 -」 『広島大学留学生センター紀要』 第20号 pp. 23-39
- [7] 野口徹・吉川孝三・金子勝比古 2009 「欧米におけるインターンシップ教育の現状調査と我国での課題」 『工学教育』 第57巻第2号
- [8] 日瀧淳子・谷芳恵・上長然・則定百合子・石本雄真・齋藤誠一・城仁士 2008 「体験活動を通して個人がどのように変容するのかを測る尺度 -これまでの関連研究レビュー-」 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』 第2巻第1号 pp.143-147
- [9] 淵上克義 2002 『リーダーシップの社会心理学』 ナカニシヤ出版
- [10] 柳田純子 2009 「産学連携プロジェクトと連動した演習教育によるキャリア形成支援 - 課題解決型学習に参画した経営系学生のキャリア形成過程の考察 -」 『東京情報大学研究論集』 第12巻第2号 pp.9-25
- [11] 柳田純子 2006 「産学共同プロジェクトの実践を通じた大学生の協同における意識・行動の変化と統合 - 生涯キャリア発達の観点から-」 『東京情報大学研究論集』 第9巻第2号 pp.39-51
- [12] Hiroshima University Study Abroad Program (HUSA) http://www.hiroshima-u.ac.jp/en/husaprogram_incoming
- [13] Mezirow, Jack, "Understanding Transformation Theory," *Adult Education Quarterly* 44 (1), 1994.

付記

本稿は、「日本高等教育学会第14回大会」における研究発表『インターンシップと短期交換留学生の意識変容-企業体験者講話の導入-』（恒松2011）にデータの再分析と加筆・修正を加えたものである。本研究は、科学研究費補助金(2009-2011年度 課題番号 21530881 研究代表者：恒松直美)の助成により行なっている研究の一環である。